

漢・魏晉・北魏の洛陽城

窪 添 慶 文

後漢・曹魏・西晉・北魏の都であつた洛陽（以下、漢魏洛陽城）と、隋唐の都であつた洛陽とは、位置が異なるといふことはよく知られているけれども、その洛陽城がいかなる姿を示していたかは、案外に知られていない。『水経注』（以下、『注』）卷一六穀水篇はその姿を伝える貴重な史料である。ただし、『注』でもって十分な情報が得られるわけではない。ほぼ同時期に叙述された楊銓之『洛陽伽藍記』（以下、『伽藍記』）をはじめとする諸史料、そして近年の漢魏洛陽城の発掘調査の結果を併せてみるべきであり、それらは本書訳注中に盛り込まれている。しかし訳注は『注』の記述に沿って施されるので、個別的事項の叙述に留まらざるをえず、全体像の把握はなかなか困難である。よつて漢魏洛陽城についてその概要を記し、必要に応じて参照していただくことにする。すでに『訳注 洛水・伊水篇』で概要は示されているが、本稿は、明らかになりつつある漢魏洛陽城の姿を今少し詳細に示したい。発掘調査結果を承けて近年の研究の進展はめざましい。それらを整理して示すことを目標とし、紙幅の関係で、特に必要と考える場合を

除いて、根拠を細かに挙げることは避ける。その点はご了承を願う次第である。

一

漢魏洛陽城の前身は西周初に遡る。西周が殷を滅ぼすと洛陽の地に二つの都城を築いたといわれる。ひとつは後に東遷した周王の居城となるもので、通常王城と称される。のちに隋唐が都とした所である。そのほかに殷の民を遷したとされる都城（成周と称された）が築かれた。これが漢魏洛陽城の最初の姿である。「漢魏洛陽城初歩勘査」に載せる平面実測図に基づく三九頁の図1の、I、IV、VIII、Xの城門を結ぶ方形の部分に相当する。

王子朝の乱が続く中の前五一〇年、晋を中心とする諸侯は狄泉（翟泉）の地に会し、成周築城を行った。この築城は拡張を伴い、図1の方形部分の北（甲・乙を除く）にあたる地域が加えられている。

中国を統一した秦は洛陽の地に三川郡を置くとともに、文信侯呂不韋の封地とした。この時再度成周城を拡大している。すなわち最初の成周城の南を拡張したのであって、これで漢の洛陽城の基本的な形が整ったことになる。

漢帝国を建てた高祖劉邦は当初洛陽を都とすることを考えたが、結局長安を都とし、洛陽には秦の三川郡を改めた河南郡を置いた。それでも元帝の時には儒家の翼奉が成周の地への遷都を主張し、王莽の時代には洛陽を長安と並ぶ都とする構想があったという。

後漢の光武帝は西暦二五年に建国すると洛陽を都と定め、南郊の儀礼に関わる施設の建築を行い、また南宮の整備

を行った。北宮の整備は明帝の時に行われている。南北宮の問題を含め、洛陽城のもつ姿は、あらためて後に述べよう。

一九〇年、董卓は献帝に強要して長安に遷都すると、命じて洛陽を焼かせた。長安を脱出した献帝が一九六年に洛陽に戻った時、「宮室は焼き尽され、百官は荆棘を抜き、牆壁の間に依る」（『後漢書』献帝紀）という惨状を呈しており、庇護する曹操は献帝を許昌に置かねばならなかった。

二二〇年に魏（曹魏）が成立すると、洛陽が都となる。文帝の時には主として漢の南宮の部分が用いられていたようであり、明帝の時に漢の北宮の地を大規模に改修したとされ、後の時代に施政の中心となる太極殿も初めて造られる。この曹魏洛陽宮の形状が基本的に魏晋南北朝期の構造を規定した、つまり曹魏洛陽宮が西晋・北魏に継承されたとする見方が現在有力となっている。ここで「宮」＝宮城として注意すべきで、宮城を包む洛陽城の城壁（以下「大城」と表現）はほぼ秦時代からのそれが継承されて北魏に至るのである。

魏帝からの禪譲によって成立した西晋は都洛陽もそのままに継承した。しかし、三二一年に匈奴族の建てた漢（前趙）によって洛陽は陥落し、捕らわれた懷帝は一年半後に殺害される（永嘉の乱）。この事件とその後に関し、五胡十六国の争乱の中では、洛陽は都城としての機能をもつことはなかった。

五胡十六国の分裂をおさめ、四三九年に華北を統一した北魏は、孝文帝の太和一七（四九三）年に洛陽遷都の意図を明らかにして洛京建設を命じ、翌年正式に遷都する。もともと永嘉の乱後二〇〇年近くを経た洛陽の建設は簡単には

進まなかったようで、「畿内の夫五万人を發し京師に三百二十三坊を築」いたのは次の宣武帝の景明二（五〇一）年のことであつた（『魏書』世宗紀）。北魏は洛陽の大城の門名は改めたが、基本的に漢魏の大城を継承している。

北魏末の内乱で台頭した高歓と対立した孝武帝が五三四年に長安に拠る宇文泰のもとに奔ると、高歓は孝静帝を擁立、直ちに鄴^{ぎょう}への遷都を宣言させ、四〇万戸（口？）といわれる人々が移動する。洛陽の資材も鄴に遷され、漢魏洛陽城は都城としての使命を終えることになる。もともと、北周は洛陽宮の再建を試みており（『周書』宣帝紀）、それは北魏太極殿の調査によっても確認されているが、未完成に終わっている。そして隋唐の洛陽城は旧の王城の地に営まれるのである。

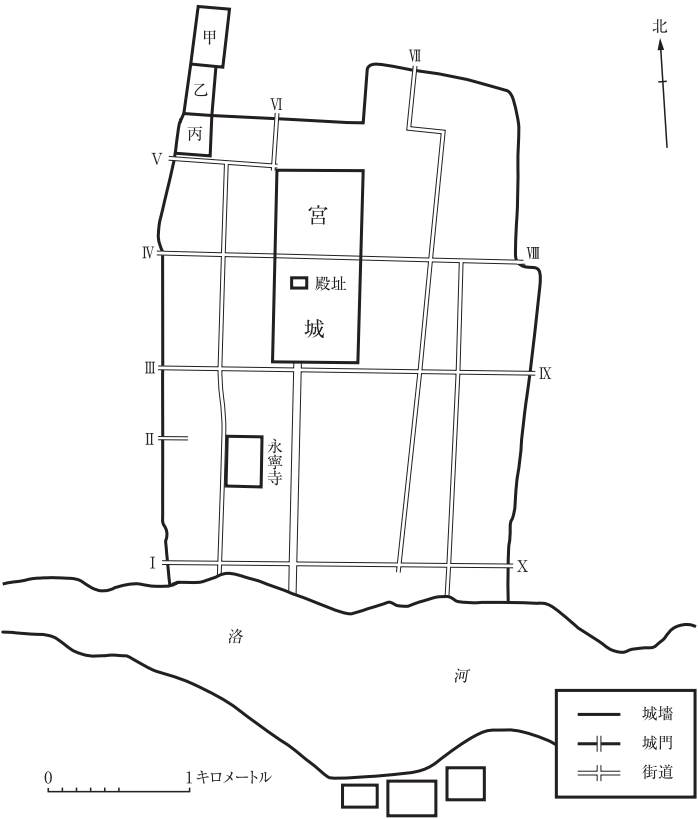
一一

上述のように漢の洛陽城の大城は魏晉・北魏と継承された。ただし、いくつかの相違点はある。門の位置と門名である。発掘調査に基づく図1に即して門名を記すと図1の下の方の表ようになる。このうち、Ⅲは北魏がⅡの位置を北に移したもので、Ⅴは北魏が新たに開いた門である。またⅣの間闔^{しょうこう}門は北魏の時にやや南に移されたことが『注』に記されている。これによって東のⅧの建春門と正対させられたのである。東西の正対という点ではⅠとⅩもそうであるほか、ⅢとⅨが特に注目される。魏晉までのⅡはⅨと正対しないが、位置が変わったⅢはⅨと正対するからである。大城の南牆部分は洛水の流路変更によって失われ、その城門址は確認できないが、文献によると、東から漢の開陽

図1 漢魏洛陽城平面実測図

中国科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城初步勘査」(『故城研究』所収)を元に作図

漢・魏晉・北魏の洛陽城
窪添



四三

門名対照表

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
漢	広陽門	雍門		上西門		夏門	穀門	上東門	中東門	耗門
魏晉	広陽門	西明門		閭闔門		大夏門	広莫門	建春門	東陽門	清明門
北魏	西明門		西陽門	閭闔門	承明門	大夏門	広莫門	建春門	東陽門	青陽門

門（魏晉・北魏も同じ）、漢の平城門（魏晉と北魏は平昌門）、漢の小苑門（魏晉と北魏は宣陽門）、漢の津門（魏晉は同じ、北魏は津陽門）があった。このうち宣陽門は北魏では旧来の位置から西に移されている。

大城の大きさは、東部（残部）が三八九五メートル、西部（残部）が四二九〇メートル、北部は全長が三七〇〇メートルである。漢代の尺度で東西が六里、南北が九里とされ、九六城と称された。

大城の内部に宮城がある。漢の宮城は北宮と南宮の二宮制であり、その間を複道が結んでいた。光武帝は洛陽に定都した時には（恐らく保存がよかったからとされるが）南宮に住み、明帝が北宮を大規模に修繕したとされる。ただし二宮の配置については議論が分かれる。かつては王仲殊氏の復元が通説化していたが、南宮の南壁が図1のⅠ―Ⅹを結ぶ路より北に置かれていることを問題として、南宮を大城南城壁に接近させる見解が銭国祥氏によって示されている。南宮の正殿は前殿とのみ史料にみえ、北宮の主要な宮殿は德陽殿と崇德殿であって、両者は並んで建てられて、その間隔は五〇メートルという。銭国祥氏は東の崇德殿が北宮の宮門のひとつである朱雀門に対し、西の德陽殿が大城の小苑門に対していたと考えている。付言すれば、同氏は南宮の南正門は大城の平城門に正対していたという。

荒廢した漢の洛陽城を再建した魏が二宮制を維持したか、それとも一宮制に移行したかについては議論が多いが、近年では一宮制が優勢となっている。上述の銭国祥氏の発言も一宮制に立った上で後漢北宮を捉えたものである。しかしこの問題は太極殿とその正門である閭闔門の問題や、都城における中軸線の問題とも絡むので、のちにまとめて取り上げることとする。

魏の時に新たに加わったものがある。西北部に城壁で区画された一角、金墉城きんようじょうが造られたのである。図1の丙とされる部分である。初期の調査ではその北にも連続して乙、甲の城があることが確認され、そのことから曹操の鄴の三台に倣ったとされてきたが、その後魏晋の城は丙のみで、甲乙は北魏のものという見方に転じた。近年では甲乙は隋末の李密の築城によるものという見解が提出されている。北魏が洛陽に遷都した段階では洛陽宮城の整備が間に合わず、孝文帝は金墉城に居たと記録にあるが、それは丙城だったわけである。

北魏の場合は図1にみるように明確に単一宮城である。東西が六六〇メートル、南北が一三九八メートルで、大城の内部ではやや西寄り、かつ北寄りの位置にあつて、ほぼ中央をⅣ閭闔門とⅧ建春門を結ぶ東西の大路が横切る。北半部の北壁はⅤ承明門から東に延びる大路に接しており、南半部はⅢ西陽門とⅨ東陽門を結ぶおおむね海拔一二五メートルの高さに沿うという大路（いわゆる横街）に面している。宮城の中心である太極殿は図1の「殿址」と記されている箇所箇所の遺址がそれであると目されて、後に確認された。この遺址の下からは魏晋期の同様の遺跡も発見された。「殿址」の南には二つの闕を伴った巨大な門址が発見されて、北魏宮城の正門閭闔門と確認されているが、その下には魏晋期の門の遺構も発見されている。北魏の宮城の南壁には（魏晋期に東側にあった司馬門が塞がれて）閭闔門以外の門は開かれておらず、東壁には北から東華、雲龍、東掖門、北壁は乾明門、西壁は北から千秋、神虎、通、西掖門があつた。

北魏宮城の正門である閭闔門の南には、大城の宣陽門まで真っ直ぐに銅駝街が延び、その左右には外朝に属する主

要な官庁群が配置されていた。なお魏晋期にも閭闔門から南に延びる銅駝街が存在している。

魏晋の宮城が一宮制であったとしても、大城のⅣ閭闔門とⅧ建春門を結ぶ線で区画される北宮と南宮の区別があり、太極殿が南に属することにみられるように、南宮は政治的空間、北宮は生活を中心とする空間であったようである。

北魏の場合も、大城の閭闔門に対する宮門千秋門（図2参照）を入った道の北に西遊園があつて、園中には靈芝台があり、宣光殿や嘉福殿、九竜殿などと飛閣で繋がり、皇帝はこの台で暑さを避けた、などという『伽藍記』（卷一瑤光寺）の記載は、北魏の宮城北半部の性格を示している。

宮城の北についてはどうか。漢の場合については北宮と大城の間を狭く復元する研究者が多い。魏晋の場合には宮城の北、大城の南に華林園（魏の明帝の時には芳林園、齊王芳の時改名）があつた。北魏も同じ場所に華林園を設け、北魏以前の時期と重なる池や建造物の名が確認できる。

大城の外部についてみておこう。漢・魏晋には明確に外郭の存在を示す文献はなく、また考古学的な証明もなされていないが、送迎の場として東の七里橋、西の張分橋が、大城を挟んでほぼ対称の位置にあり、郭があつた可能性を示唆する。北魏は宣武帝の時に東西二〇里、南北一五里の規模の外郭の建設を行い、その東郭と西郭の遺址の一部も発見されている。東西の距離は最長部で四二五〇メートル（西郭は南に行くにつれて東側に寄る）。北郭の一部も発見されているが、洛水の河道変更により、南北の距離は明らかでない。大城の宣陽門の南に銅駝街に繋がる街路が洛水にかかる永橋を越えて円丘に至るまでに真っ直ぐに延び、その間には洛水の北、街路の東に靈台、明堂、辟雍、太学の礼

制建築が置かれ、また洛水を南に越えたこの街路の東西には四夷館、四夷里という東西南北の地から北魏に帰した人々や使節を居住させる区画が設けられていた。なお礼制建築は漢魏晋期も同所に設けられている。

三

魏晋の宮城は一宮制か二宮制かについてという議論に関わる最も重要な史料は、

(イ)『魏志』文帝紀黃初元年条の裴松之注…明帝の時に至り、始めて漢の南宮崇德殿の処に於いて太極・昭陽の諸殿を起こす。

(ロ)『穀水注』…魏の明帝、上は太極を洛陽南宮に法り、太極殿を漢の崇德殿の故処に起こし、雉門を改めて閭闔門と為す。

である。いずれも明帝の太極殿が漢の南宮にあることを示すと考えられ、二宮説の根拠とされてきた。その場合一宮制は北魏から始まるということになる。他方、二宮とすると他の史料と矛盾するところから一宮説が唱えられ、漢の北宮の北半分が北宮、南半分が南宮と称され、その一宮の地に北魏の宮城が営まれたとする。北魏の太極殿と閭闔門が魏晋のそれらの址に造られたことが調査によって確認され、先述のように宮城が南北で性格を異にしていたことも、その考え方を支持しよう。

ただし、東晋末に洛陽を実見した裴松之や、北魏の人である酈道元の記述の重みは無視しがたい。故に一宮説の立

場からは、漢の崇徳殿は北宮にもあったことが示され（村元健一氏）、また（イ）については洛陽や中原の地を実見した東晋や南朝の人々の記述が必ずしも信頼できないことが主張され（田中一輝氏）、（ロ）についても、それに続く『穀水注』の「南宮すでに建ち、（魏）明帝、侍中京兆の韋誕をして古篆を以てこれに書せしむ」という記事は魏の南宮を指すから、（ロ）の南宮も魏のものであるという見解がある（向井佑介氏）。

現在は二宮説を強く唱えた佐川英治氏も一宮説の優位を認めるようになっていく。現状はそうであるが、魏晋の太極殿や閭闔門の下には漢代の建築物が確認されていないなど、一宮説で決まりとまではまだいいきれないようだ。

ところで隋唐長安城は承天門―朱雀門―明德門という中軸線の左右にきれいな対称形を画く平面プランをもつ。北魏洛陽城はどうかといえば、図1にみられるように、太極殿―閭闔門―銅駝街のラインは宮城の中央ではなく、西に寄っている。また通説的位置を占めてきた宿白氏の外郭を含めた洛陽の復元図は、東西六里の大城の東と西それぞれ七里のところに東郭と西郭を設けている。六里の宮城を併せると外郭の東西幅は二〇里となり、『伽藍記』の伝える数字と一致するが、太極殿から南に向かうラインは郭城全体でも中央西寄りという問題は解消しない。後に調査で明らかにされた外郭の遺址は宿白説より東西にさらに遠い。この新たに確認された地点をもとに佐川英治氏は、太極殿―閭闔門―宣陽門―円丘という中軸線の東と西にそれぞれ一〇里（北魏尺による）のところに外郭が設けられた、つまり宮城の内部では必ずしも中軸線ではないラインが、外郭を含めた洛陽城全体では左右対称の中軸線となるという説を提出している。さらに、北魏のこの構想の出発点は魏の明帝の太極殿建設にあったが、魏では太極殿―銅駝街という

ラインのほかに、宮城の司馬門―大城の宣陽門というラインも軸線として機能していて、北魏は宣陽門を西に移して太極殿のラインに繋げ、一本化した、という。

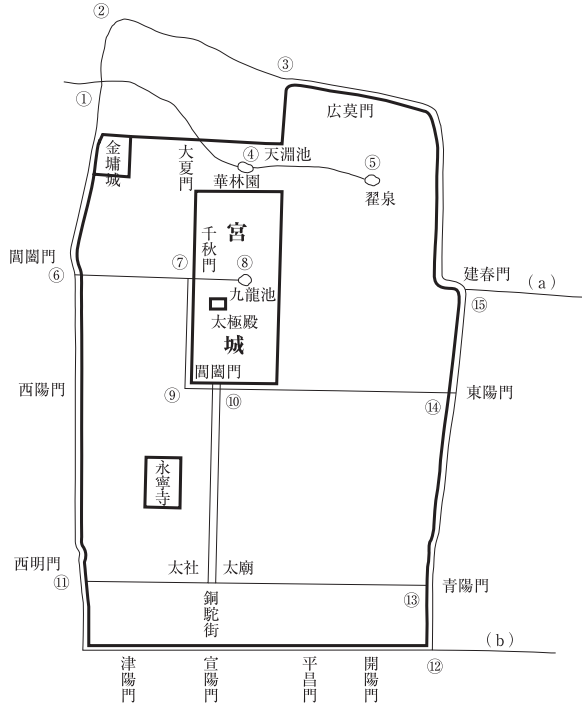
外郭の調査については疑問の声もあるようであり（『千年帝都』）、円丘の位置も未確認である。坊の建設では漢尺を用いたのに、外郭の建設に北魏尺を用いたのは何故か、など問題も指摘されるが、都城と南郊あるいは円丘の関わりという観点からの都城の変遷研究は、少なからぬインパクトをもっていると考えられる。

なお、佐川氏をはじめ近年の都城研究は南郊における儀礼を重視する。それにも関わるが、漢の長安城は宮殿などの配置が「坐西朝東」つまり西側が優位であったのに対し、後漢洛陽城では「坐北朝南」、北側優位への転換が行われたという楊寛氏の所説があったことを付記しておく必要がある。

四

漢魏洛陽城は水流に囲まれている。南に洛水があり、さらにその南には伊水が北東に流れるが、北魏の円丘は伊水の北に築かれた。大城周辺および内部の穀水に関わる記述の理解のために、図1をもとに、失われている大城南牆部分を補い、I-Xを北魏の門名に改めるなどの措置を行って図2を作成した。細い実線が河渠を示す。大城の周辺は図1の依拠した「漢魏洛陽城平面実測図」の河渠の線をそのまま用いるが、一部は洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調査」所掲の図2を参照し、城内部分は『注』の記事に基づいた推定線である。

図 2



水経注疏記注
穀水篇

靈台 明堂 辟雍

西から流れてきた穀水は、聚落の存在や河道未発見の故もあって、河道は必ずしも正確にはたどれないが、①で三つの流れに分かれる。そのひとつは（図1の）甲乙城側を北に向かい、②で東に曲がり、③で大城の北城壁に沿うようになって東に流れ、大城の東北角で南に曲がり、建春門の外で曲がって張り出し部に沿って東に向かう。この流れを『注』は穀水と表現する。①で北へ流れる穀水と分かれた流れは大城西牆に沿って南に向かい、大城の西南角で東に曲がり、そのまま南牆に沿って流れて大城東南角に至る。ここまでの流れも『注』はほとんどの場合穀水と表現するが、ただ一箇所⑥で枝分かれする水を説き起こすに際して陽渠水と記す。東南角⑫で枝分かれた穀水は北に流れて建春門の東⑮で、先述の南流してきて張り出し部に沿って流れる穀水と合流し、ともに東の方角に流れる。この流れを（a）としよう。この合流について、『注』は「南流する穀水は」樂里道より屈まがって東し、陽渠に出づ」と記述しており、北流してきた穀水は「陽渠」と称されている。なお、⑫で枝分かれして北流する穀水については、大城南北の標高の差から北流は考えにくいとする説もある（塩沢裕仁氏）。

⑫で北流する水と分かれた穀水（b）は、『注』によれば東に流れて阮曲や鴻池陂を経たあと、七里澗を経てきた（a）と合流し、洛水に流れ込む。合流した後の水についても、『注』は穀水ともいい、陽渠水ともいう。楊守敬疏は穀水といい、陽渠というのを一水二名の事例と解している。

以上のほか、『注』は穀水は枝分かれた流れ（渠と称している）を、細かに記す。まず、①で分かれて東に流れる渠がある。この渠はやがて東南に転じ大夏門のあたりで大城内に入り、次いで華林園に入る。そして同園内の、④天淵

池を経て園の東に出ると、⑤翟泉に注ぐ。(二)で述べた翟泉(狄泉)の後身であろう。翟泉に入った水がどうなるかについては『注』は語らない。

次に大城西牆に沿って南流する穀水から、⑥の地点で分岐して東に流れ、⑦千秋門から宮城北半部に入る渠があり、⑧靈芝・九龍池に注ぐ。同池からの先についてはやはり叙述がない。この渠には⑦の地点で分岐して南流する枝渠があり、この枝渠は宮城の西南部で東に曲がり、宮城の南牆の傍らの路、つまり西陽門と東陽門を結ぶ大路に沿って東に流れ、⑭の地点で北流する穀水(『注』文は「陽渠」)に注ぐ。この途中、⑩閭闔門から南に延びる銅駝街の左右を流れる渠が分枝し、両渠とともに南流して次に述べる⑪から東流する渠に注ぎこむ。⑥からさらに南流する穀水は、⑪西明門の地点でも分岐し、この渠は太社・太廟の南を経て、⑬青陽門外で穀水(『注』は陽渠と表現)に注ぐ。上述の「陽渠水」の事例を併せると、護城河の機能をもつ穀水は陽渠と称されることもあったと解すべきであるが、『注』は特に東南角から北流する部分を陽渠と表現しているようにみえる。ちなみに大城北側を流れ、屈曲して建春門外に至るまでの穀水を陽渠と表現することはない。なお、⑨宮城の西南角付近で、調査により該当する水路の址が確認されている。

以上のような穀水とその枝渠の流れに沿って、その近くに位置する地に関わる建造物や歴史、エピソードを『注』は叙述する。楊守敬の『水経注図』は、彼の理解する『注』の叙述に従って作成されているので、『注』を読み進める上で大いに参考となるが、図1で知りうる北魏都城の形状とは異なる形状を呈している。また周祖謨「北魏洛陽伽藍

図」は、『伽藍記』に基づく一方、『注』の穀水とその支渠および関連事項を書き入れているが、『水経注図』と同様の問題があり、また（b）の記載を欠いている。

五

北魏は郭城内を一里四方の大きさをもつ坊で区画した。『魏書』世宗紀によれば三二三坊だったという（『北史』卷一六広陽王嘉伝には三二〇坊とあり、最後の「三」は衍字との指摘もある）。他方『伽藍記』には二二〇里（坊）とある。東西二〇里、南北一五里であれば一里四方の区画は三〇〇できるわけで、それに南への張り出し部を加えれば三二〇となり、宮城内など坊が設けられなかったであろう所を除けば実質二二〇坊という理解（宿白氏）が妥当であろうが、内城・郭城（二二〇坊）以外の坊里を含むという考えもある（張金竜氏）。坊（里）は牆で囲まれていて四つの門が開かれ、門には里正、吏、門士が配置されていた。

文献に残る坊（里）の名称は多くない。知られる魏晉の里名はごく限られる。北魏の場合は『伽藍記』で、そのおおよかな位置を含めて四一の里名を知りうるが、何といっても限定的である。郷名も記されていない。他方、北魏の場合、遷都後急速に普及した墓誌の作成により、多数の里名および一部の郷名を補いうる。墓誌は、本貫、死去した場所、葬った場所を多くの場合記載するからである。張金竜氏はこれによって補って、『伽藍記』と併せて里名は九二に及んだが、その後に続く墓誌の増加によって、さらに知りうる里名は多くなっている。管見の限り二三例を追加する

ことができる。

少し細かすぎるが、北魏の郷名と里名について紹介しよう。遷都後の洛陽には河南郡の治所が置かれたが、河南郡に属する多数の県の中に、洛陽、河陰県があった。墓誌に頻出するのはこの両県である。洛陽県の治所については『伽藍記』巻二城東・景興尼寺条に「（緩民）里内に洛陽県あり」とある。河陰県治の所在地は『注』が西明門外つまり大城西牆の西側にあったとする皇女台の傍らにあったらしい（角山典幸氏）。

洛陽県で名称がわかる郷は一〇郷。まず大城内であることが確実な都郷であるが、それに属する里名は多く、一二ある。次に所在が判明するのは金墉城内の肅民郷であるが、判明する所属の里は徳宮里のみ。他の七郷も属する里名が一つずつしか知られず、里名が記されない一郷もある。

河陰県に属する郷・里の出現数は洛陽県に較べるとかなり少ない。都郷にしても里名はひとつしか知られず、ほかに郷名が判明するのは三郷のみ。このうち河陰県西原郷斜（しゃぎやう）坂里（唐耀墓誌）と明示されるのは葬地であり、馬溝村という墓誌出土地から判断すると、漢魏洛陽城西北、漚水（てんすい）の東にあたる。漚水の両側とくに東側は北魏の宗室や官僚の墓葬の地であった。同じく葬地である中郷穀城里（趙郡王妃馮会墓誌）、漚水の西側にある孝文帝陵の西北と記される西郷漚源里（元暉墓誌）をも含めて、河陰県はここまでを範囲に含んでいた。もちろん張分溝が境とみなされる洛陽城西郭のかなり西である。一方、石育夫妻が死去した河陰延（えん）沽里は『伽藍記』巻四で大市にあると記される延沽里に同じであり、同じく大市の北にある奉終里と同名の里で死去した斛斯謙も河陰県と明示される。つまり大市の一帯は河陰

県に属していた。河陰県治の位置を併せ考えると河陰県の東側は大城西牆近くまでを含んでいた。「皇宗（宗室の人々）」が住み王子坊と俗称された寿丘里は河陰県に属していたのである。

ただし、河陰県と記される里名が「洛陽某人」「洛陽某第」などの「某」にあたる里名としてみられることがある。郷名が異なる同名の里と考えることもできようが、河陰県が洛陽郭内を含むとすれば、河陰に換えて洛陽と表記したという可能性も十分にありうるのではないか。もしそうだとすれば墓誌に最も多い「洛陽某里人」「洛陽某里第」という表記が必ず洛陽県を指すとは限らないことになるう。

参考文献（本稿の叙述に関わるものとどめる）

洛陽市文物局・洛陽白馬寺漢魏故城文物保管所編『漢魏洛陽故城研究』科学出版社、二〇〇〇
杜金鵬・錢国祥主編『漢魏洛陽城遺址研究』科学出版社、二〇〇七

中国社会科学院考古研究所編『漢魏洛陽城礼制建築研究』文物出版社、二〇一〇
以上三書に含まれる個別の文献は分出しない。

楊寬『中国古代都城制度史研究』上海古籍出版社、一九九三

段鵬琦『漢魏洛陽故城』文物出版社、二〇〇九

呉濤『漢代洛陽研究』科学出版社、二〇一七

張金竜 「北魏洛陽里坊制度探微」(『北魏政治与制度論稿』甘肅教育出版社、二〇〇三、所収)

洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調査」(『洛陽考古』二〇一六―四)

中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽市漢魏故城太極殿遺址的発掘」(『考古』二〇一六―七)

塩沢裕仁「千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境」雄山閣、二〇〇九

同 「後漢魏晉南北朝都城境域研究」雄山閣、二〇一三

渡辺将智「後漢政治制度の研究」早稲田大学出版部、二〇一四

村元健一「漢魏晉南北朝時代の都城と陵墓の研究」汲古書院、二〇一六

佐川英治「中国古代都城の設計と思想 円丘祭祀の歴史的展開」勉誠出版、二〇一六

田中一輝「西晋時代の都城と政治」朋友書店、二〇一七

角山典幸「北魏洛陽城研究の一視角―河陰県治の位置を中心として」(中央大学文学部東洋史学研究室編『池田雄一教授古稀記念

アジア史論叢』白東史学会、二〇〇八)

外村中 「魏晉洛陽都城制度攷」(『人文学報』九九、二〇一〇)

向井佑介「曹魏洛陽の宮城をめぐる近年の議論」(『史林』九五―一、二〇一二)

塩沢裕仁「漢魏洛陽城穀水水文考」(『東洋史研究』七一―二、二〇一二)